

平成 31 年 4 月 8 日

教 育 長 様

代表者 校 園 名 : 大阪市立本田小学校

校 園 長 名 : 銭本 三千宏

電 話 : 6581-1531 F A X : 6581-3194

事務職員名 : 喜連 尋滋

申請者 校 園 名 : 大阪市立本田小学校

職 名 ・ 名 前 : 主務教諭 指野 淳

電 話 : 6581-1531 F A X : 6581-3194

校印

研究コース
グループ研究 A
校 園 コード (代表者校 園 の市費コード)
561155

平成31年度 「がんばる先生支援」研究支援 申請書

◇本研究の支援を受けたく、次のとおり申請します。

1	研究コース	コース名	グループ研究 A	研究年数	継続研究 (2 年目)
2	研究テーマ	資質・能力を育む「社会に開かれた教育課程」の実践的研究 ――効果的に ICT を活用するための授業づくり――			
3	研究目的	テーマに合致した目的を端的に記載してください。 大阪市教育振興基本計画の施策「ICT を活用した教育の推進」を効果的に行うため、「逆 向き設計論」による授業づくりとカリキュラムデザインを実践的に研究することが本研究の 目的である。次期学習指導要領は「内容ベース」から「資質・能力（コンピテンシー）ベース」 の移行がなされている。その際、カリキュラムデザインと授業デザインを明確にして教育実践 しなければ、「活動主義」や「網羅主義」（以下「双子の過ち」と記述）に陥り、児童にどの ような力を育成したのかあやふやになる危険性が昨年度の研究で明らかになってきた。その 上、ICT を意図的に授業で用いなければ、ますます、児童の学び（獲得すべき「知」）と学習 の成果はあやふやになる。学習のゴールを「永続的理解」として設定し、さらにルーブリック を明確にした評価活動を行う授業において ICT の活用は効果的になる。大量採用による若手 教員の増加に伴い指導力の向上は大きな課題となっている。公開授業を複数回行い、学校情報 化先進校として、効果的に ICT を活用するための授業づくりを提案し、若手教員の指導力向 上の一助を行っていく。			
4	研究内容	継続研究は、前年度の成果と課題を分析した内容を踏まえて記載してください。 昨年度、多くの参観者から次のような趣旨の感想をいただいた。「それぞれの学年の授業展 開の中で、学習課題がいつ、どこで、だれを対象にしているかが明確にされ、児童が自らの問 題意識を学習活動に盛り込み、昇華させ、目的意識をもって学んでいた。（原文ママ）」逆向 設計論に基づく授業研究とカリキュラム研究によって「知の構造化」を図り、「本質的な問い （見方・考え方）」の吟味と「永続的理解（領域・単元を通して付けたい力）」の明確化に取り組 んだからだと自負している。 本年度は学習課題を「知っている・できる」レベルの課題、「わかる」レベルの課題、「使え る」レベルの課題（以下「パフォーマンス課題」）の三層構造でとらえ、逆向き設計論に基づ 単元構成と授業展開を立体的に進める。「日常の世界」から「教科の世界」に誘う「わたり」 を重視することによって児童の学習意欲を喚起する研究は多くある。しかし、児童が教科で学 んだことを「日常の世界」で活用し、「使えるレベル」まで学びを深める（以下「もどり」）研 究は比較的少ない。「パフォーマンス課題」の工夫で「もどり」に重点を置くと、各教科の 「見方・考え方」の意味を児童はより一層認識し、それが「深い学び」につながる。この「パ フォーマンス課題」に児童が取り組む場面で、ICT は最大限に効果をするのではないかと考えて いる。以上が本研究のアブストラクトである。次の柱で研究を進める。 ○「主体的・対話的で深い学び」の授業が「双子の過ち」に陥らないようにするため、「逆向 き設計論」をどこの学校、どの教師でも取り入れられるよう、汎用化、コンパクト化させる。 ○各教科の領域・単元の永続的理解と本質的な問いを具体的に示せるよう研究する。 ○効果的なパフォーマンス課題とルーブリックを例示できるよう研究する。 ○「もどり」の場面に取り組む授業公開を行う。 ○ ICT 活用先進校としてプログラミングも含め、ICT の授業への効果的な活用の公開授業を行 う。			

5	活動計画	<div>d@s@4 t@</div> <div>4月3日「今、求められる学びと授業づくりー逆向き設計論と授業づくり」研究目的と計画の確認 京都大学教育学部大学院准教授 石井英真先生</div> <div>5月17日 プログラミング実技研修 ヴィリング株式会社 中村一彰氏(非公開)</div> <div>6月21日 ICT授業公開 早稲田大学教職大学院教授 田中博之先生(公開)</div> <div>7月5日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(非公開)兵庫教育大学准教授 奥村好美先生</div> <div>7月23日「パフォーマンス評価におけるルーブリックのワークショップ」兵庫教育大学准教授 奥村好美先生(非公開)</div> <div>9月11日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(非公開)京都大学教育学部大学院准教授 石井英真先生</div> <div>10月2日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(非公開)講師未定</div> <div>10月8日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(公開)筑波大学附属小学校盛山先生</div> <div>10月11日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(公開)筑波大学附属小学校平野先生</div> <div>11月22日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(非公開)関西学院大学教授佐藤真先生</div> <div>12月4日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(非公開)京都大学教育学部大学院准教授 石井英真先生</div> <div>12月9日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(公開)筑波大学附属小学校夏坂先生</div> <div>12月20日プログラミング実技研修 ヴィリング株式会社 中村一彰氏(非公開)</div> <div>1月22日「今、求められる学びと授業づくり」授業研究会(非公開)関西学院大学教授佐藤真先生</div> <div>2月 研究のまとめ</div>				
6	見込まれる成果とその検証方法	<div>大阪市教育振興基本計画に示されている、<u>子どもの心豊かに力強く生き抜き未来を切り開く力の向上</u>および<u>教員の資質や指導力の向上</u>について、見込まれる成果を端的に記載し、その成果について、客観的な指標により必ず数値で示すことができる検証方法を記載してください。</div> <div>○研究メンバーには京都大学「学力評価スペシャリスト研修 目標達成シート」(別紙)により、A「教科の本質を追及する単元構想に関する内容」B「学習主体の授業構想に関する内容」C「目標に準拠した評価の実現に関する内容」D「カリキュラム改善に関する内容」の4観点で目標達成チェックを行い、研究の進捗状況と研究目標の達成度を調査する。</div> <div>○上記の「目標達成シート」の結果を踏まえ、教師自身の授業へのメタ認知と改善力についてまとめ、公開研究発表で報告を行う。</div> <div>○公開授業については参観者にアンケート(教育センターのアンケートに準拠)を取り、参加者の満足度を85%以上にする。</div> <div>○児童の学びに向かう力の涵養がどの程度進んでいるかを測定するため、高学年児童を対象に次の5観点でアンケートを行う。<div>1. やりたいと思ったことが学習でできたか。(80%以上)</div><div>2. 同じ過ちを繰り返さないように学習できたか。(70%以上)</div><div>3. すでにしてしまったことに修正を加えたり、次を改善することができたか。(60%以上)</div><div>4. 実際に学習したことについて、何を、だれに、どうしたのかを詳しく説明できたか。(80%以上)</div><div>5. 学んだことは自分にとって有意義であったか。いろいろな場面で役立ちそうか。(80%以上)</div></div> <div>○非公開の授業研究については、学校協議会のメンバーに参加してもらい、自由記述によるアンケートで、ステークホルダーの意見を聴取し、今後の研究に生かす。</div>				
8	研究成果の共有方法	<div>◆研究発表【必須】 <u>報告書提出日(2020年2月25日)までに必ず行ってください。</u></div> <div>○研究発表の日程・場所(予定)</div> <table><tr><td>日程</td><td>令和 元 年 6 月 21 日</td><td>場所</td><td>大阪市立本田小学校</td></tr></table> <div>◆代表校園HPでの共有【必須】</div> <div>他の共有方法を計画している場合は記載してください。</div> <div>その他の日程は「5. 研究計画」に記載</div>	日程	令和 元 年 6 月 21 日	場所	大阪市立本田小学校
日程	令和 元 年 6 月 21 日	場所	大阪市立本田小学校			
9	代表校園長のコメント	<div>次期学習指導要領では従来の学力の範疇にとどまらず「資質・能力」を育成するという方針のもと、「主体的・対話的で深い学び」の視点から学習過程の改善も推奨されている。昨年度の研究を通して課題として挙がってきたのは、改訂の趣旨とは裏腹に「双子の過ち」に学校現場が陥らないかということである。活動主義と網羅主義という「双子の過ち」は教師の指導力を著しく低下させる。指導力向上のためには「どのような学びを保証するのか(永続的理解)」 「教科の見方・考え方を重視し、どのように学びに向かわせるのか(本質的な問い)」を軸に「知を構造化」し、「どのような証拠で評価するのか」を明らかにする必要がある。その上で様々な活動や体験を展開すれば、「主体的・対話的で深い学び」が「資質・能力」を育成する学習過程として意味をなす。それを明確に示したのが「逆向き設計論」である。本研究は次期学習指導要領完全実施への大きな示唆となる。</div>				